

城山小学校の殉難児童を捜して

村上美奈子

1 殉難児童の生前の姿を捜すということ

1945年8月9日当時に城山国民学校に在籍していた原爆で亡くなった子どもたちは1400名とも言われている。城山小学校では、1951年8月以来、現在もお毎月9日に「平和祈念式」が行われていて、そこでは、「子らのみ魂よ」という歌が大切に歌い継がれている。その歌は、毎年8月9日に平和公園で開催される平和祈念式典でも、山里小学校の「あの子」と1年交代で歌われている。その「子らのみ魂よ」の2番の歌詞には、「過ぎし日の友の姿」や「なつかしのみ魂」という言葉が出てくる。しかし、原爆投下から長い年月が経って当日を実体験として知る人も少なくなり、式典の多くの参加者が、原爆で亡くなっていった子どもたちの誰一人のイメージも思い浮かべることができないということはとても寂しいことのように感じられもする。

そのような思いを抱きながら、原爆や震災について、特にそれらを伝えるために作られてきた絵本に注目しているうちに、広島原爆のことや震災の釜石でのことを絵本にしてきた指田さんと出会った。そして、指田さんの写真絵本『ヒロシマ 消えたかぞく』（ポプラ社）が2019年7月に出版された際に、広島の土橋にある「ハチドリ舎」で開催されたイベントに参加した。その時に、原爆で全滅してしまった家族であっても、その親戚が預かっていたアルバムなどからその家族のことを今の時代に絵本としてよみがえらせる可能性があることに思い至ったのである。

2011年の震災の後、私はかなりの頻度で岩手、宮城、福島を訪れ続けているが、宮城県名取市の閑上については、震災から10年が経った3月に初めて訪れた。閑上には、「名取市震災復興伝承館」と「津波復興祈念資料館 閑上の記憶」の2つが、互いに徒歩で行き来できる海沿いにある。後者の「閑上の記憶」を見学した際、中学生だった息子を津波で亡くされた丹野祐子さんが、震災から数年後に新聞の取材を受けた際に、「息子の声が思い出せない」と嘆いていた記事の展示が目にとまった。

災害でも戦災でも、亡くなった人のことを覚えている人がいる限りは、その亡くなった人は、近い人の心の中に生き続けている、そのようなことが難しくなるくらいに年月がたった後になっても、確かに生きて存在したその犠牲者を悼み、教訓を語り継いでいくことが、その犠牲者への供養でもあるという思いを、震災から10年が経った閑上で、新たにした。

そして、上記の『ヒロシマ 消えたかぞく』の他にも、津波で多くの児童が犠牲となってしまった石巻市の大川小学校の子どもたちや家族のことが描かれた『ひまわりのおか』（葉方丹・作、

岩崎書店、2012年）や、2021年2月に亡くなられた関千枝子さんが、かつて広島で亡くなられた同級生全員の一人一人のことを丁寧に取材してまとめられた『広島第二県女二年西組』（筑摩書房、1985年→ちくま文庫、1988年）を読むことによって、長崎の城山小学校や山里小学校で犠牲になった多くの子どもたちについても、このような形で悼んでいくことができるようにはならないものかと思うようになっていった。さらに、原爆文学研究会で城山小学校のことについて発表をした際には、川口隆行さんから、広島の翠町中学校における『空白の学籍簿——第三国民学校の被爆実態をたずねて』（翠町中学生徒会報告書編集委員会・編、1980年）という冊子をまとめた実践を教えていただき、その学校の出身者である児童文学作家の中澤晶子さんにお会いして様々な資料をお借りして学びながら、子どもたち自身の手で原爆の犠牲になった学校の先輩たちの存在を掘り起こし、また、当時の満蒙開拓団の派遣にその学校が積極的に関わっていったこと等の社会的な状況にも目を向けていった教育実践を知ることができた。

原爆で殺された子どもたちも、どんなに残虐な殺され方をしたのか、というだけではなく、どんな子どもで、どんなふうにならなくて、どのように家族や友達と毎日を過ごしていたのか、そして、戦時下にあつてどのような社会状況だったのかということ等についても合わせて学び直し、それらを複合的に伝えていくことが、それらの子どもたちがひとりひとりの人間として生きてきた証と当時の社会を、今やこれからの未来に残していくことになると思う。その点で、指田和の写真絵本『ヒロシマ 消えたかぞく』はそれを実現している作品のひとつであると言える。そのような作品のように、私も城山国民学校に通っていた子どもたちについて、同様の試みを心を込めて進めていきたいと考えている。

そのような動機から、ここ数年は城山小学校の平和祈念館のロッカー等にある資料を見せていただいたり、長崎市の原爆資料館の図書室で荒川秀男先生が調べたことがまとめられた資料をコピーさせていただいたりするようになった。そのようなことをしながら、その中にある子どもたちの名前や住んでいた地域の記述と、『長崎 爆心地復元の記録』（調来助・編著、日本放送出版協会、1972年）にある地図や、長崎の爆心地公園などにある当時の地図を照合して、何か手がかりがないかと探す日々が始まった。

2 城山国民学校で共に学んだ友達のことを語ってくださる方々との出会い

2-1. Oさん

東京在住のOさんは、1945年当時は城山国民学校の6年生に在学していたが、原爆投下の2週間前に伊王島に家族で疎開して難を免れた。当日校舎内にいて生き残った江頭千代子先生の長女である6年生の長女美津子さんや、近所の同学年の友達との思い出を語ってくださった。

Oさんの自宅にはすでに2022年の5月と10月の2度伺って、城山1丁目の復元地図や、城山小学校平和祈念館でいただいた『創立六十周年記念誌』（1981年）の中に掲載されている『なつかしの城山小学校』見取図（昭和16～19年頃の記憶による）と一緒に見ながら、あるいは、2021年12月にOさんが同居の次男女夫婦と長崎の城山小学校やその付近を訪れた際の写真や映像と一緒に見せていただきながら、同学年の友達や、今もご健在の兄弟たちのお話を聞かせていただいている。

2-2. Sさん

1945年当時2年生だったSさんは、前述のOさんと同様に城山1丁目に住んでいたが、やはり同じく7月20日頃に、宮崎へ疎開して助かった。当時の城山1丁目の地図を作成なさっており、そこには、原爆で亡くなりたいとこや親しかった友だち、防空壕で助かった子どもたちのことなどが書き込まれていて、当時のその地域の子どものことを知るうえでの大きな手掛かりを数多く得ることができる。疎開先で友達から受け取った手紙やいとこの写真、その他にも様々な貴重なデータを提供して下さって、2022年9月には、護国神社やその付近の自宅のあった場所などを車で案内していただいたりもした。

城山1丁目の当時の様子に関しては、2016年2月27日（土）に放映されたテレビ長崎制作の「11時1分の刻印 よみがえる 閃光に消えた町」でも、京都在住の兄弟が城山1丁目の地図を作成していたり、その地図を元に長崎大学の学生が卒業研究で城山地区を3D復元するプロセスにおいて、200軒の一軒一軒に表札を付けて一人一人の存在を感じながら名前を刻んだりしていく様子がドキュメンタリーにまとめられていて、その番組は原爆資料館の図書室で視聴することができる。また、「TOMORROW 明日」という映画にもなった井上光晴の『明日——一九四五年八月八日・長崎』（集英社、1982年）には、「城山町の市営住宅」、「護国神社」、「城山国民学校」、「聖マリア学園」などの記述があり、この地域のことが描かれていることが分かる。

2-3. Tさん

今も城山小学校の近くにお住まいのTさんは、1945年には城山1丁目の新築の家で家族9人で住んでいたが、原爆の後は1人きりになってしまい、時津の親戚の家で苦勞をしながら学校へ通った。その後46年間、原爆のことは思い出したくも語りたくもなく生きてきたが、兄弟姉妹や両親を悼む思いから証言活動を開始し、今なお精力的に続けている。2009年には長崎市の平和祈念式典で被爆者代表として「平和の誓い」を読み上げた。2022年6月に城山小学校でお会いしたり、12月に原爆資料館で修学旅行生への講話と一緒に聞かせていただいた際等にその後の時間で個人的にお話を伺ったりしているが、兄弟姉妹やいとこ、近所の友達のことなどをよく覚えていて、今後もまだ教えていただきたいことがたくさんある。

2-4. Yさん

Yさん姉弟とお会いできたのは全くの偶然だった。その姉弟のさらに弟にあたる方が、埼玉の私の自宅からほんの100メートルほどのところにお住まいで、その方が家族の聞き書きを冊子にまとめていらっしゃるというので、2022年6月に埼玉で話を伺って冊子をお借りして読ませていただき、また、8月9日には、長崎在住のYさん姉弟と城山小学校でお会いして、松山町の復元地図を一緒に見ながら当時のご近所のことを教えていただいた。

Yさんのご家族の家は松山町の爆心地からわずか数十メートルのところにあった。松山町の復元地図を確認すると、爆心地に最も近い二十数件のうちの一軒ということになる。

8月9日は、家族の人たちは、小江原の梨園にいたり、城山小学校に通っていた4年生の三男と1年生の二女は島原に疎開していたりして、9人家族のうち、瓊浦中学校に通っていた次男はその日は城山の消防団に動員されていて犠牲になってしまったものの、他の8名は無事だったということである。

長女は、当時17歳で、城山国民学校に動員されていたが、8月からは磨屋小学校で代用教員をすることになっていたということである。面接も済ませていたが、開始が延期になっていて、当日は城山国民学校にいるはずだったが、妊娠中の母がその時に限って具合が悪く、9日は子どもたちを梨園に呼び集めて手伝わせていたという。

つまり、長女は、当時の城山国民学校の在校児童ではなく、動員されていて原爆に遭った女学生たちと知り合いだったりいとこ同士だったりする。

三男は、当時4年生だったが、上記の通り8月9日は島原に疎開していた。

城山小学校でそのおふたりからお話を伺った際には、それぞれが通った城山幼稚園や浦上天主堂近くの幼稚園のこと、近所に来ていた紙芝居屋さんや家族で通った銭湯のこと、三男が普段遊んでいた隣近所の年齢の近い友達のこと、被爆1週間後に訪れた自宅付近の惨状などを聞かせていただいた。

3 今後の展望

指田和『「ヒロシマ 消えたかぞく」のあしあと』（ポプラ社、2022年）には、写真絵本『ヒロシマ 消えたかぞく』の主人公である鈴木六郎さん一家の広島の追悼平和祈念館への遺影登録をめぐって、原則遺族でなければ登録ができず、その家族のアルバムを大切に保管し続けていた親戚の鈴木恒昭さんと一緒に遺影登録の手続きを成し遂げ、その結果、さらに写真絵本の読者の反響につながるエピソードが出てくる。

長崎の追悼平和祈念館についても、登録されている遺影は10485名分（2022年12月2日現在）と

ということで、ここでも広島と同様に原則遺族でなければ登録ができないということもあり、一家全滅も多く、また、長い年月がたった現在となつては、膨大な人数の犠牲者の名前が登録されないままになってしまう可能性が高くなっている。

城山小学校のように、あるいは、広島でも各学校が慰霊碑に子どもたちの名前を刻んでいる事実を反映して、そのような子どもたちの名前も広島と長崎の追悼平和祈念館で来館者たちがその名前を確認し、追悼できるようにはならないだろうか、と思っている。

また、城山小学校の名簿についても、一人一人について調べていくと、名簿が作られた当初から現在までに名簿が学校の新しい冊子に転載されていく過程で誤記が生じてしまっているものや、一緒に遊んでいた友達の証言によると名前の漢字表記が誤っているらしいもの、また、よく聞か話であるが、名簿にある学年と実際の学年が異なっているもの、あるいは、指摘により削除された事例もあるが、数十年後に犠牲者名簿に名前がある本人が遠方から訪れて誤載に気づいた件や原爆の前に事故死していたのに名簿に載っている事例もある。それらの誤りは、この名簿をまとめることがどれほどに困難を極めることであったかをそのまま示しているのであるが、明らかな誤りを訂正したり、実際はこうだったのでは、と付記していったりする作業もできるのであればやっていくべきではないかと考えている。

そして、被爆の実相やその後のそれぞれの人生をたどるだけではなく、1945年当時の日常を掘り下げていくことで、戦時下の生活も浮かび上がってくる。国民生活の全てが否応なく戦時体制に組み込まれていたこと、その中でも、それぞれの家族の戦時下なりの幸せな日常があったこと、城山小学校がある高台のすぐふもとにも朝鮮の人たちが住む集落があって、地域の子どもたちは近づいてはいけないと大人たちから教えられていたこと等、様々な当時の側面が見えてきている。

城山小学校は2023年に創立100周年を迎える。1945年当時には九州一と言われた立派な自慢の校舎で学んでいた子どもたちや地域の記憶が、被爆30年を機に、被爆当時の教頭だった荒川秀男先生のご尽力により作成されていった殉難者名簿を手がかりにしながら、人類史上特筆すべき教訓として語り継がれていかなければならないと切に思う。

荒川秀男先生の膨大な資料は、ご子息の和敏さんによってリスト化され、そのうちのほとんどが現在は原爆資料館に寄贈されている。それらの資料を今後も閲覧させていただきながら、城山国民学校の子どもたちがその土地に生きて生活していた証をわずかずつでも明らかにしていきたい。